

② 自称・対称・他称・および敬語表現について

小 林 美 恵 子

1-1 自称

マンガ作品の登場人物の自称については、話者と対者の関係による話者の待遇意識を作者がどうとらえるかということによって決定されていると考えられる。作者の意識の反映については後述することとし、まず話者と対者の関係による自称の現れ方を見ていきたい。日本語においては自称も待遇表現の一種であることはいうまでもなく、ひとりの人間が相手によって、あるいは談話の行われる状況 — あらたまった席であるか否かなど — によって自称を使い分けるのは特に珍らしいことではない。

まず調査対象として62作品に登場する 184人の女子中高生のうち、自称の出現する93人についてどのような自称の用い方をしているかを見る。[表1] 93人というと少ない感じもするが、184人の中には点景的な人物として2～3言のセリフを述べるのみという人物もかなり含まれていることにより、このような数となっている。

[表1] 登場人物の自称

1 「あたし」のみを用いる	50人 (53.8%)
複数の相手に対して用いている者	28人
1人の相手に対して用いている者	22人
2 「私」のみを用いる	22人 (23.7%)
複数の相手に対して用いている者	10人
1人の相手に対して用いている者	12人
2 'わたし'のみを用いる	3人 (3.2%)
複数の相手に対して用いている者	2人
1人の相手に対して用いている者	1人
3 相手によって「あたし」「わたし(私)」を使い分ける	1人 (1.1%)
4 1人の相手に対し「あたし」「わたし(私)」を交えて使う	9人 (9.7%)
5 その他(他の自称代名詞、自分の名・姓など)を用いる者	8人 (8.6%)
計	93人 (100.0 %)

(注) ここでいう「登場人物」とは、女子中高生の登場人物であり、他の男性、大人の女性などは含まれない。以下の表の他の「登場人物」についても同様である。

〔表1〕は作者の行った表記に基づいて作製した。ここで問題になるのは「私」と漢字で表わされたものの読み方である。たとえば「あたし」をイメージしつつ「私」と表記するという作者の存在も否定はできない。ただマンガの場合、若い読者を想定してであろうか、漢字にルビが振ってあることが多く、それにしたがいえば「私」は例外なく「わたし」である。そこで小論においては「私」は「わたし」と発音されているものと考え、以下「私」(漢字表記)「わたし」(かな表記)を一括して扱っていくこととする。

1-1-1 「あたし」

〔表1〕より登場人物の自称として圧倒的に多いのが「あたし」であり、ついで「わたし(私)」が使われていることがわかる。女性の自称としては通常「わたし」が最も一般的であり、「わたくし」はそれよりややあらたまった言い方、「あたし」はややくだけた言い方と見ることができる。一昨年行った女性のインタビュー番組における調査(注1)(以下「女・インタビュー」と略す)においても「わたし」を用いる者が最も多く、それについて「わたくし」が用いられていた。それに比べるとマンガにおける女子中高生の自称はかなりくだけたものであるといえよう。ちなみに全用例中「わたくし」を用いたものは1例のみである。

(069) 高校生が美容師志望のBF(ボーイフレンド、以下同様に略す)を紹介するモノローグ(読者への語り)として
「ワタクシの専属美容師である。まだ免許はないけど…」

この高校生はモノローグを含め他の場合はすべて「あたし」(14例)を用いている。読者への語りかけであること、「である」という文末、「ワ

タクシ」というカタカナ表記などからややふざけながらかしこまるという特殊な場合に用いられ効果をあげている、いわば特別な例といってよい。

ところでマンガにおける女子中高生の自称の主流が「わたし」よりくだけた「あたし」であることの理由として次の2点を考え得る。

- ① マンガに現れる話者と対者の関係が同年代で親しい友人関係に限られる結果「あたし」の使用が多くなる。
- ② 登場人物の待遇意識が希薄なために、いわゆる目上に対しても、またあらたまった場でも「あたし」を用いる。

このことを確かめるために自称を、話者と対者の関係を単位として見ていくこととした。〔表2〕

ある話者（A）にとって対者（B）は年齢・性・親疎などについて固有の関係を持つ。これを1つの単位として、その単位の中でどのような自称が選択されているかを見るわけである。話者と対者が逆転した（B）→（A）の対話では関係も変化するから「関係」の単位としては別のものとして数える。なおモノローグも対者0の「関係」の1つとして考えた。以下「関係による」としたものはすべてこの方法に従っている。93人の女子中高生を話者とする「関係」において自称はどのように用いられているだろうか。

〔表 2〕

「関係」による自称

対者の話者 話者 に対する による 自称	男 性						女 性						む・不 機年明 数令・ の差面 対等性 者を 含	モ ノ ロ ー グ	計	※ () は 横
	年 上		同 年 齢		年 下		年 上		同 年 齢		年 下					
	家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人				
あ た し	3 (2.9)	11 (10.7)		26 (25.2)	1 (1.0)		4 (3.9)	3 (2.9)		33 (32.0)		2 (1.9)	1 (1.0)	19 (18.4)	103 [59.5]	軸 に
わ た し (私)	1 (2.0)	8 (16.3)	1 (2.0)	13 (26.5)			1 (2.0)		2 (4.1)	14 (28.6)			1 (2.0)	8 (16.3)	49 [28.3]	対 す
あたし・わたしの 混 在				6 (54.5)						3 (27.2)				2 (18.2)	11 [6.4]	る %、 〔 〕 は
あたし・わたしと 名 前		2 (50.0)		1 (25.0)										1 (25.0)	4 [2.3]	縦 軸
あ た し と 姓		1 (100)													1 [0.6]	に
そ の 他 の 自 称	1 (25.0)	1 (25.0)	1 (25.0)											1 (25.0)	4 [2.3]	対
ワタシとあたし														1 (100)	1 [0.6]	す る
自称を用いる 「関係」(計)	5 (2.9)	23 (13.3)	2 (1.2)	46 (26.6)	1 (0.6)		5 (2.9)	3 (1.7)	2 (1.2)	50 (28.9)		2 (1.2)	2 (1.2)	32 (18.5)	173 [100] (100)	%
関 係 総 数	11 (1.9)	61 (10.7)	4 (0.7)	126 (22.0)	6 (1.0)	6 (1.0)	10 (1.7)	23 (4.0)	2 (0.3)	209 (36.5)	1 (0.2)	6 (1.0)	33 (5.8)	74 (12.9)	572 (100)	

〔表2〕においては、便宜的なものではあるが、親疎の関係を家族と他人とに分類してみた。ここでいう他人とは血縁や同居状態がないということで、文字通りの「赤の他人」をも含むが、むしろ友人、知人など親しい関係である場合が圧倒的に多い。同年齢の家族という関係が4例あるが、これは双子の姉妹、遅生まれと早生まれとで同学年となった兄妹などで、後者については中高校生においては暦年齢より学年の区切りで同年齢・異年齢の意識を持つことが普通であると考えられるのでこのように分類した。

〔表2〕においても「あたし」が半分以上を占め「わたし（私）」がそれに続くが、これらの出現はある関係に偏ることなく、どの関係においてもほぼ似たような割合で「あたし」「わたし（私）」が現れている。「自称を用いる関係」におけるそれぞれの関係の比率と「あたし」や「わたし（私）」におけるそれとを比較して見ると、対者が女性・同年齢・他人（クラスメートや親友という例がほとんど）の関係で「あたし」の割合がやや高く、男性・年上・他人（あこがれの先輩という例が目立つ）でやや「わたし（私）」の割合が高いことが目立つくらいである。さきにあげた2つの可能性にのうち①についてはこの結果によりほぼ否定されたといえるだろう。マンガに現れる関係に同年齢以下の親しい友人は確かに多いが、それだけには限られない。そしてそれ以外の関係においても「あたし」は多く使われている。

では②はどうか。相手との関係や談話の状況にかかわらず固定した自称を選ぶ傾向は確かに存在するといえる。これは「あたし」についても「わたし（私）」についても言えることである。ただ〔表2〕を見て気づくのは、「あたし」「わたし（私）」の混在や「あたし」「わたし（私）」に交えて「○○子」のように自分の名を言うなど、自称に揺れの見られる例が女性（3関係）に対するより男性に対する場合により多く見られることである。（13関係）このような場合自称の揺れには待遇意識の反映があるのではないかと考えられる。

ところで、小論の冒頭でも述べたとおりここで注意すべきは待遇意識が

登場人物の意識そのものでなく常に作者の目を通したものであることだ。もちろんこのことは本調査においては全調査項目にわたって言えることであるが、自称においては特に留意すべきであると思われる。「わたし」と「あたし」の差異は例えば対称における「あなた」と「おまえ」の差異ほどに大きいものではない。「あなた」や「おまえ」が作者の意図を越えて登場人物の性格や立場で選ばれる可能性は「わたし」と「あたし」の場合よりは大きいだろう。したがって「わたし」と「あたし」の揺れには作者の意識 — 無意識であるという意識をも含め — が反映している可能性がより強いと言える。そこで作者がどのような自称の選択をしているのかを見るために作品ごとにどのような自称が用いられているかを見る。〔表3〕

〔表3〕 作品による自称の現れかた

A	登場人物全員が「あたし」を用いる		24篇 (38.7%)
B	登場人物全員が「わたし(私)」を用いる		13篇 (21.0%)
C	「あたし」を用いる人物と「わたし(私)」を用いる 人物が登場する		4 篇 (6.5%)
D	「あたし」「わたし(私)」「ワタクシ」が混在する 人物が登場する		10篇 (16.1%)
E	その他の自称を用いる人物が登場する		2 篇 (3.2%)
F	自称が現れない		9 篇 (14.5%)
計			62篇 (100 %)

〔表3〕において特に作者の意識が明確に現れるのはCであろう。またこの表には現れないが62篇中にはそれぞれ2篇と3篇ずつ同一の作者によ

って描かれた作品があり、これらの作品間の登場人物の自称の選択の差異にも作者の意識の反映が強く見られる。以上を含めて、次に自称の揺れについて実例をあげながら考察し、自称決定の意識を探っていく。例の最初につけた番号は作品No.である。

1-1-2「あたし」と「わたし（私）」の混在と使い分け

① 相手によって「あたし」「わたし（私）」を使い分ける（1人）

〔表1-3・表3-D〕

(062)・高2サッカー部マネージャー「ゆかり」から幼なじみの後輩（高1）

サッカー部員に

「ううん^{わたし}私たちは平気」

・あこがれの先輩に

「これ！ あたしも持ってる」（サッカーの本のことを）

その他にモノローグとして「私」2例、「あたし」1例が見られる。同作品の他の登場人物である友人はゆかりに向かい「私も授業サボってどこか行きたいな — 」

② 1人の相手に対して「あたし」「わたし（私）」が混在する（8人）

〔表1-4・表3-D〕

これらの例に特徴的なのは基本的な自称は「わたし（私）」でその中に1～2例の「あたし」が混じっているものが多い（6人）ことである。他の2人のうち1人は「あたし」をおもに用いているがモノローグ4例中に2例の「わたし」があり、1人は「あたし」「^{わたし}私」を1例ずつ用いている。この2人について使い分けの基準としてはっきりしたものは見られない。

おもに「わたし（私）」を使う6人のうち、次の5人については例外としての「あたし」の理由づけができるように思う。

(074)・高2、絵本作家志望の「あけみ」が自らも秘かに恋を自覚していた友人（男・同年）に告白されて、逆上して部屋を飛び出す。

「あたし 薬をもらってくる……」

・同じ友人を「大嫌い」と言ってから相手を傷つけたと気づきモノローグ

「あっ…あたし あんなこと言うつもりなかった！」

(070)・高校生「栗子」後ろから突然呼びかけられて

「あたし？」

(076)・高1「よしの」クラスメートで親友の2人の女子と話す。それまでのやや重い話題を転換しようとして

「あ…聞いてー あたしねー関口宏にあくしゅしてもらったことあるんだースゴイ？」

(071)・高校生「深美」BFに

「あのねあのね聞いてくれる？ あたし、このビー玉もらった時、このビー玉のことが大好きになったの」

「ビー玉よ、これ^{わたし}私のお守なの」

(104)・「様子」（大学生か？）「^{わたし}私」2例「あたし」1例 社会人の恋人とデートの打合せ

「あ、あたし この日授業休めない」

「こうして^{わたし}私が出てくればお昼だけでも一緒に食べられるし」

「あたし」が用いられるのは、感情的に激したり、突然の呼びかけに反射的にことばがでるような場合(074、070) ごく親しい関係で自分のことばに注目してほしいと働きかけるとき(076、071)などである。これらは格助詞・係助詞などを伴わずに用いられることも多く、文中での格 — 文法的な位置から独立して、相手を自分に着目させるような効果をもたらしている。相手が年長であったり、いわゆる目上であったりまた女性から男性に使われる場合「甘え」の効果をもたらすともいえるだろう。「あたし嫌…」というのと「私は嫌です。」の違いである。(062)の例もその1つと言えそうだ。

③ 作者が登場人物によって「あたし」と「わたし」を使い分けさせる。

〔表 3 - C〕

(029)・主人公 中学生「わこ」…「あたし」

・他校の友人で、私立校から自分も進もうとしている公立高を受験しようとするわこを援助する「真帆子」…「^{わたし}私」

2人は親しいが、わこからは「真帆子さん」真帆子からは「わこちゃん」と呼んでいる例もあり、わこのほうに多少の遠慮があるような関係である。

(059)・主人公、U F Oに夢中で威勢のいい「由多加」…あたし

・由多加の友人で、由多加の兄を好きになる「千賀」…「^{わたし}私」 千賀は由多加に比べずっとおとなしく控え目な少女として描かれる。

(058)・主人公「有子」は友人のB Fを好きになってしまい悩んでいる…

「^{わたし}私」

・友人「千賀子」B Fとの仲を不安に思い、B Fにあたったり、有子をなじったりするが、最後に潔く有子にB Fをゆずると宣言する…「あたし」

(290)・「みどり」ごく普通の中学生(?) ……「あたし」

・魚の王の姫……登場人物の夢のシーンに若い女性の姿で登場する。
「^{わたし}私」「です・ます」調で話す。

④ 作者が作品によって女子中高生の自称を使い分ける。(杜真琴による2作品)

(063)・「雪子」(高校生) …7年前に施設から引きとられ穂波家の養子となる。一緒に引きとられた血のつながらない「兄」を慕っている…「わたし」を用い、「です・ます」調の多い丁寧な文体で話す。

(064)・「奈都美」高校生、学校生活を舞台に、恋人に調理実習で作ったカップケーキを食べさせたり、共通の友人を心配したりが描かれる…「あたし」

以上から登場人物の性格づけと「あたし」「わたし(私)」の使い分けを見てみると、「あたし」は活発・自己発現的・日常的な話題を語る登場人物に多く、「わたし(私)」を用いる人物はどちらかといえば内気・自己抑制的・丁寧・非日常的という性格づけをされていることがわかる。

全体的に見てマンガの登場人物に「あたし」が多いのは、これらのマンガの世界が学校など日常的な場での日常的な生活や感情を題材とすることが多く、主人公として描かれる女子中高校生は単なる「お姫さま」=客体的存在としてではなくある程度活発な自己発現的な存在でなければ主人公たり得ないことによるのではないか。さらに彼女たちはただ活動的でしっかり者であるだけでなく、ときには心の揺れや不安やまた恋人の前でのかわいらしさも見せなければならない。それらをあわせ含む自称として「あたし」が「わたし(私)」以上に用いられることになるのだと考えられよう。

1-1-3 その他の自称(1) — 自らを名や姓で呼ぶ

自らの名を呼んで自称としたものが4関係、5例、姓を呼んでいるものが1例見られる。モノローグの1例を除きいずれも男性に対するものである。〔表2〕

(047)「アキにいい、こんどは成美のとなり!!」

(高1の成美は高3のアキオに恋心を燃やし、アキオのGFあゆとはりあっている。アキオを挟んでいるあゆを意識してのことばである。

他の自称はすべて「あたし」)

(056)「仙太郎、美登利あの枝が欲しいわ」

(相撲部屋の後援会長の娘からひいきの若手力士に。他の自称はすべて「わたし」)

(225)「鈴子^{りんこ}だって悪気はなかったんだよーっ! だって3人とも同じくらい好きだったし」

「3人とも鈴子^{りんこ}の大事なおともだちだから」(中学卒業時、3人の男

子友人に第二ボタン* を渡されて、ことわろうとする。他の自称は「私」)

* 第二ボタンとはいうまでもなく卒業時に特別な女子生徒に告白と記念の意をこめて贈る中学生の習慣である。

(253)「とにかく桃子冷静に行動するのよ」

(夢の中で体が風船のようにふくらんだのにあわて、自分に冷静になるように言いかせているモノログ。自分を指してはいるがこれは自称というより自分に向かっての対称とすべき例だろう。他の自称は「わたし」)

(115)「せっセンセ、西村お先に失礼しまふっ(す)」

(047)(056)は相手にねだることは、(225)は相手の気を悪くしないように「好きだから」「大事だから」と留保を含んでの断りで、いずれも相手をいい気分にさせながら自分の要求を通そうという物言いである。名前による自称は学齢前後ぐらいの女の子などには比較的良好に見られることで、どちらかといえば幼さを感じさせる言い方といえる。自らを幼い者とおとしめながら相手を持ち上げ自分の要求を通すのは「甘え」に他ならないだろう。マンガの中でヒロインがこのような自称を用いている顕著な例として『タッチ』(あだち充・小学館)があるが、この作品の登場人物「南(みなみ)」の自称について、田中政幸氏は、82例の用例中50例が最も親密で互いに愛情ともいうべきものを感じあっている「達也」との間に用いられたものであり「飾りや遠慮のない、幼い頃からのもの言い」と見「二人のより親密な場をかもし出している」とする。またさらにその効果を

大半は同年齢層の読者たちは、幼い、甘えているといったマイナスの評価をせず、やはり「かわいい」あるいは「かわゆい」と受けとったはずである。

と書く。(注2)だが今回の調査の例のうち(047)(056)の例はいずれもヒ

ロインを悩ませる少々アクが強い少女のことばとして発せられたもので、単に「かわいい」とは捕えにくく、やはりかなり強引な「甘え」を表す作者の意識が存在するように思う。

(115)はこの調査の中では非常に特殊な例でむしろ軍隊などで自称として用いられる姓 — 相手にとって多数の中の1人として自分を客観的に称呼する — の系列につながるものと思われる。ちなみに筆者は十数年にわたり都立高校の教員をしているが実際に、このような例に遭遇したことはない。

1-1-4 その他の自称(2) — 「オレ」「ぼく」

以上の他に目立つ自称としてそれぞれ1人ずつ「オレ」「ぼく(ボク)」を使う登場人物がいる。このうち「オレ」を使うのは空手が趣味で鉄下駄・稽古着姿で歩き、女装趣味・女性アレルギーの双子の弟を持つという少女「右京」で、いわば性の倒錯した世界そのものが題材となっている。(046) 発することばも

「いっとくけどオレだってタダ働きはやだからな」(双子の弟に) というような、完全に「男言葉」と言ってよいものだし、弟左京と対になった命名といい、マンガに描かれた姿といい、男の子と区別がつかない。このようなマンガが存在することへの興味深さはあるが「オレ」という自称については女性が男性的なことばを使っているというよりは、単なる男性のことばとして見るべきだろう。

「ぼく(ボク)」(034)のほうは、バイクにはねられた少女がはねた自責で海に飛びこんだ男とともに幽界をさまよい、同じ場所で以前事故死をし、加害者への恨みから成仏できないでいる「先生」と出会って幽界の遊園地へ行くという、いわば少女の幻想をコメディタッチで描いた作品で、主人公の高校生「夕子」によって用いられる。この少女のことばは

「おおさすが冬、暗くなるのが早いや」

「ボク死んじゃってどーしてくれるんだァ！」

というような威勢のいい中性的なものだが、

「16歳の乙女にあるまじき姿だわッ」

のように女性特有とされる終助詞も現れるし、描かれた姿もスカートをはいた少女である。はねた若者は「すっげーいい男」だが「オカマ」であると設定されていて「へーエ、おじさま夕子ちゃんの先生なのォ!」「夜の遊園地ってステキねえ」という物言いをする。この辺のこれも倒錯したことばづかいを引き立たせるために作者が「ボク」という自称を設定したのであろうと見ることができる。

「東京の中学あたりの女の子の自称ぼく」についてはすでに1978年NHK・TVが取り上げ、出演した寿岳章子氏は、それについて次のように述べている。

NHKは彼女たちに面接していた。その結果の理由は「あたし」などと言っているのは男の子と一対一のつき合いができないという至極まっとうで、しかもきびしい答えによって語られていた。そのフィルムを見ながら、私は教えられることが多かった。「あたし」ということばは弱いものとしての女の立場を示すにはまことに都合のいいことばではあるが、対等に勉強し、対等に遊び、時には争うそんな暮らしではあまりにも何か鼻の先にぶら下げるような意識があり過ぎて、邪魔であることこの上ないのであった。(注3)

このような考察とその後の十数年の日数を見れば、今回の調査に現れた「ぼく」はむしろ予想外に少なかったとも言える。「ふつうの女の子」が「ぼく」を使うことにマイナス評価が付きまとうというわけではないが、実際に使うものは少ない、というのが本調査から推測される「ぼく」の現実の使用状況というところか。

ちなみに本調査以後、次のような作品が登場していることを報告しておく。(「シンデレラ・バトル」椎名あゆみ「りぼん」1991.10 集英社) いつも「オレ」と自称していた「超元気少女・楓」が友人「てっぺい」に好きと「捨て身の告白」をする。それに対して「てっぺい」は「俺も好きよ、

“アタシ”って言うようになったらつきあってやるぞ」と返すのである。
「てっぺい」自身は「楓」に対して「こんなイキのいい女、他の奴にやるにゃーもったいなさすぎるよなー、やっぱ」という気もあり、その活動性を認めているのだが、活動性の象徴としての「おれ」は「楓」の中ではコンプレックスとなり、矯正されていくべきものとなっていく。女子中高生のことばを決定する要素として、自らの発語の欲求をこえて、他者、特に異性の目が働いていることを思い知らされる例である。

1-2 対 称

調査対称としたマンガの中で話者が直接相手に呼びかけたり、相手を指し示していることばを、その関係の数によって整理した。〔表4〕表中○○で示しているのは名前、△△は姓、○、△はそれぞれ名・姓の一部をもって呼称としているものである。なお1人の話者から同一の対者に2種類以上の呼称が用いられることがあるが、それぞれを別個の「関係」として数えている。したがって表中「対称を用いる関係」が「関係総数」より大きくなっている場合もある。

〔表 4〕

「関係」による対称

	対者の話者 に対する 関係 話者による 自称	男 性						女 性						計	
		年 上		同 年 齢		年 下		年 上		同 年 齢		年 下			
		家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人		
家 族 に 対 す る 呼 称	父	ババ・ママ	1					5						6	
		お父さん・お母さん						1						1	
		お父さま・お母さま						1						1	
	母	マイ・マザー						1						1	
		お兄ちゃん・お姉ちゃん	3							1				4	
		兄ちゃん・姉ちゃん	1											1	
	兄	兄さん・姉さん	1											1	
		弟	兄貴・姉貴	2											2
			○ ○				2			1					3
	姉		○ ちゃん	1		2									3
		○			1									1	
		妹	ガキ				1								1
	あ ん た					1				1				2	
	祖 父 母		おじいちゃん	1					1						2
		おばあちゃん													
		小 計	10	0	3	0	4	0	9	0	3	0	0	0	29
姓 名 を 基 調 と す る 対 称	姓 名 を 基 調 と す る 対 称	△ △ さ ん		6		2					9			17	
		△ △ ちゃん									1				1
		△ △ く ん		1		22									23
		△ △				7					2				9
		△ ちゃん		1											1
		○ ○ さ ま				1									1
		○○さん(ｼｯｸ名含)		4						1		7			12
		○ ○ ちゃん				1						11		1	13
		○ ○ く ん		2		12									14
		○○(ｼｯｸ名含)		6		18		4				43			71
		○ さ ん				1				1					2
		○ く ん		1		1									2
		○ ちゃん		1		1		1				4			7
		○				4									4
		△ △ ○ ○ さ ん								1					1
		△ △ ○ ○				3									3
ニ ッ ク ネ ー ム				6						6			12		
	小 計	0	22	0	79	0	5	0	3	0	83	0	1	193	

役職・職業・立場を基調とする対称	先生（校長先生含）		5					1					6	
	△ △ 先生		3										3	
	先輩		5					1					6	
	△ △ 先輩		1										1	
	○ ○ 先輩		1					1					2	
	教官		1										1	
	社長さん・秘書さん		1					1					2	
	委員長				1								1	
	その１年						1						1	
小計	0	17	0	1	0	1	0	4	0	0	0	0	23	
親族呼称を基調とする対称	おじさん・おばさん		2					1					3	
	じいさん・ばあさん		1										1	
	おじいちゃん							1					1	
	おばあちゃん													
	○ に い		1										1	
	計	0	4	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	6
対称代名詞	あなた		4							3		1	8	
	あなた		5		15		2			23			45	
	そっち				1								1	
	小計	0	9	0	16	0	2	0	0	0	26	0	1	54
その他	あけみの下僕 ボチのバカ者		2							1			3	
対称を用いる関係		10	54	3	96	4	8	9	9	3	110	0	2	308
関係総数		11	61	4	126	6	6	10	23	2	209	0	6	465

注 「関係総数」からはモノログ、対者が不明であったり複数であるものを除いてある。

1-2-1 家族に対する呼称

家族間で呼称が出現する関係は29あるが、対母親（8）対兄（8）が多く、姉妹関係は双子1組（3種の対称を用いている）を除いてマンガの題材として自体とりあげられていない。流行している『ちびまる子ちゃん』（さくらももこ・集英社）や『あさりちゃん』（室山まゆみ・小学館）が姉妹を題材の中心としてとりあげていることなどから見れば意外な感もあるが、これらのマンガが小学生を主人公に姉との関係を描いているのに対して、本調査の対象となったマンガは女子中高生の立場で描かれているので、興味の対象が兄を含め異性へと傾いているのだと考えられる。— マンガの世界では「兄の友人」は少女にとってあこがれの異性となることが多い — 家族に対する呼称は全般的に丁寧さの度合の少ないものが用いられてる。両親に対してのパパ・ママが目立つほか「(お～)ちゃん」が多く、「さん」や「さま」を用いたものは少ない。兄に対して「○ちゃん」と名を呼んでいる例も見られる。親子や兄弟の上下意識の希薄な現代の家族関係を反映しているのだろう。母親に対して「お母さま」と「マイ・マザー」というのが1例ずつあるが、「お母さま」は自称の項でもとりあげた(063)の養女から義母へのもので、

「何だっていいのよ、お母さまが買ってきてくださるのなら」
と母の贈物を喜ぶ娘のセリフである。今回、調査したマンガの題材としては、母との深刻な断絶を描いたものはなかったが、それでも通り一辺の心配ばかりしている無理解な母が描かれることが多いマンガの世界では(063)は題材自体やや特殊という気がする。「マイ・マザー」は(034)(これも自称で「ぼく」の例としてとりあげた)で病院で目覚めた「夕子」が母を見て叫ぶ。やや芝居がかった場面。実際に使われることがあるというよりはコミカルに話をすすめようとする作者の意図があらわれたのかもしれない。なお「お母さん」の例も同じ主人公から母親に用いられている。

1-2-2 姓・名を基調とする呼称

姓や名に「さん」「くん」「ちゃん」をつけたり、呼び捨てにしたり、

あるいは姓・名の一部をとって「ちゃん」をつけるという呼び方は、〔表4〕で見る限り、年上の男性に対するものを除いて、同年令以下の関係で専ら用いられる。193関係中22と年上男性に対するものが約11%を占めるが、これも先生とか「よそのおじさん」（大人の男性）に用いられたものではなく1～2才年上のBFに対するものがほとんどである。もっとも、同じように姓・名を基調にするといっても対者によってどのような言い方をするかにはかなりの違いがある。名+さん・くん・ちゃん、姓+さん・くん・ちゃんに着目して整理してみる。（%はそれぞれの関係数に対するものである。）

- ・対者が同年女性である場合 …………… 83関係
 - { 姓（呼び捨て・+さん・+ちゃんなど） 12（14.5%）
 - { 名（呼び捨て・+さん・+ちゃんなど） 65（78.3%）
 - { 呼び捨て 45（54.2%）
 - { ~さん 16（19.3%）
 - { ~ちゃん 16（19.3%）
 - { ~くん 0（0%）
 - ニックネーム 6（7.2%）
- ・対者が同年男性である場合 …………… 79関係
 - { 姓（呼び捨て・+さん・+くんなど） 31（39.2%）
 - { 名（呼び捨て・+さん・+くんなど） 39（49.4%）
 - { 姓+名 3（3.8%）
 - { 呼び捨て 29（36.7%）
 - { ~さま 1（1.3%）
 - { ~さん 3（3.8%）
 - { ~ちゃん 2（2.5%）
 - { ~くん 35（44.3%）
 - ニックネーム 6（7.6%）
- ・対者が年上男性である場合 …………… 29関係
 - { 姓（+さん・+くんなど） 8（27.6%）
 - { 名（呼び捨て・+さん・+くんなど） 14（48.3%）

呼び捨て	6 (20.7%)	(注)
～さん	8 (27.6%)	
～ちゃん	2 (6.9%)	
～くん	4 (13.8%)	
ニックネーム	0 (0%)	
先輩・ ○○ △△ 先輩	7 (24.1%)	「年上の友人」 に対する言い方 として一つの群 を成す「先輩」 を含めて考えた。

どの関係においても姓よりは名を呼ぶことが多く、また呼び捨てが目立つ。特に同年の女性に対する場合この傾向が顕著である。あまり親しくないライバル、日常的なつきあいの少ない関係などにおいては「名+さん」が用いられるから、ごく親しい友人関係においてはほとんどの場合呼び捨てといっても過言ではない。同年男性の場合は呼び捨てが多少減り「～くん」と「くん」付けで呼ぶ例がそのかわりの位置を占める。「くん」という敬称は対男性専用で女性に対して用いられたものは1例もない。なお年上に対しても名の呼び捨てや「くん」付けが案外多い。一方で「さん」をつけて呼ぶことが同年男性に対する場合に比してかなり多いこともいえる。「くん」が同年男性に対しては親疎に関係なく用い得るのに対し、親しい日常関係のない上級生、(あまり年の離れていない)学外の年上の人などには使いにくい面があるのかと考えられる。このような場合「先輩」という語も便利に用いられるようである。女子中高生が上級生を「先輩」と呼ぶことは日常的によく見られる印象であるが、本調査においては「さん」や呼び捨てより低率でしか現れない。この語が一般的に呼称として用いられるようになったのが比較的新しい — (ちなみに現在40才の筆者は中高時代に上級生を「先輩」と呼んだことは記憶にないが、30才前後の人は既に日常的なことばとして使っていたという) ことから目立つ印象があるのかもしれないが、使われる範囲は案外限られているようだ。このように見ていくと、特に親しい関係において自由で遠慮のない対称の使い方を行っている反面、それなりの待遇意識による対称や敬称の選択が行われていることも否定できない。

1-2-3 役職・職業・立場を基調とする呼称

ホームルームの一員から学級委員長を「委員長」と呼びかけた例と、部のマネージャーが後輩の1年生に対し「その1年!」と呼びかけた例を除き、すべて年上の人に呼びかけたものばかりである。役職などで人を呼ぶことは、「～さん」と呼ぶことをはばかれる目上の関係などでしばしば用いられる便利な言い方である。時には相手に対して、名前を用いる個人的なつきあいではない、そういうつきあいはしないという意見表示ともなり得る。同年令に対して「委員長」と用いた例(242)もワンマンでクラスから浮きあがった学級委員長に対する級友からの皮肉、批判的な言辞として用いられている。なお役職を基調とする呼称には学校生活を反映して「先生」と「先輩」が大半を占めている。「先輩」に関しては前項で述べた通りだが、先生に対して、面と向かって「～さん」などと呼びかけた例はなく、後述するように「ゴリー山口」(076)などと教師を呼びながら噂話をしている例もあることなどと比べれば、対称においてはきわめて穏健で、使い分けの意識が働いていることが察せられる。

1-2-4 親族呼称を基調とする呼称

身うちではない関係において「おじさん」「おばさん」「おじいさん」「おばあさん」などの親族呼称を基とするような呼び方がされることは、言われる立場からのものをはじめ社会における批判をよく耳にするとところだが、本調査の女子中高生のことばにおいては用例も少なく、特徴的な用い方もない。そもそもマンガの世界にこのような関係の他人が登場すること自体が少ないのである。

1-2-5 「あんた」と「あなた」

いわゆる対称代名詞を用いる家族外の関係では「あんた」45例(83.3%)に対し「あなた」8例(14.8%)と「あんた」を用いる関係が圧倒的に多い。(この他に家族に対して用いた例が弟、双子の妹に各1組ずつある)これは自称における「あたし」(59.5%)、「わたし」(28.3%)に対応

して、あらたまった形よりも、よりぞんざいな形が使われ、その傾向は自称よりさらに強い。「わたし」と違って女性・年上の対者には出現していないが、これは直接に相手を選ぶという対称の性格によるものと思われる。男性の場合、年上のBFなどかなり親しい関係が描かれているが、女性については対称代名詞を用いて話せるような相手そのものがマンガに登場しない。

ところで「〇〇」と呼び捨てにされ、「〇〇くん」「あんた」と呼ばれている相手 — 特に年上や同年の男性は女子中高生にどのような対称を用いているだろうか。次にあわせて整理してみた。〔表5〕

〔表5〕 女子中高生はどう呼ばれているか

	話者 対称	男 性						女 性						性・年 齢等不明	計
		年 上		同年齢		年 下		年 上		同年齢		年 下			
		家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人	家 族	他 人		
姓名を基 調とす る対 称	△△		4		8				1					1	14
	△△さん		4		11										15
	△△くん		1												1
	〇〇	6		1	20	1	1	6							35
	〇〇さん		6		2										8
	〇〇くん		1												1
	〇〇ちゃん		8		8	1		1	2					1	21
	〇	1													1
	△△〇〇					1									1
小 計	7	24	1	49	3	1	7	3					2	97	

役職・立場など	△△マネージャー					1									1
	〇〇先輩					1									1
	小 計	0	0	0	0	2	0	0	0					0	2
親族呼称など	ねえちゃん				1										1
	おねえちゃん													1	1
	お嬢さん			1				1							2
	小 計	0	0	1	1	0	0	1	0					1	4
対称代名詞	あ なた		1					2							3
	あ ん た		1				1	1							3
	お ま え	2	4		14	1	1								22
	き み		7		3										10
	て め え				1										1
	お め え				1										1
	小 計	2	13	0	19	1	2	3	0					0	40
計		9	37	2	69	6	3	11	3					3	143

表中、女性の同年齢および年下の話者によるものが1例もないが、これらの話者は調査対象の女子中・高生として〔表4〕に含まれたのである。

同年齢の男性の姓・名を基調とする対称では姓・名をを含め呼び捨てが女性から男性に対する場合よりさらに多いことが目立つ。29例（58.0%）女性にはほとんどなかった「△△さん」「〇〇ちゃん」も比較的多いが、これらは女性から男性に対して用いられる「△△くん」「〇〇くん」に対置していると考えられる。対称代名詞では女性からは「あんた」が多かったが、男性の場合、同年齢では1例もなく、かわりに「おまえ」が多用され「おめえ」「てめえ」さえも現れている。

（060）「ああ、真紀か、てめーきのうよけいなこと言ったろ」（親しい友人
どうし）

(072)「おめえには死んでもムリだよ」(バイク競技に夢中な男子が、バイクを持ち出して倒してしまい、起こせないでいるクラスメートの女子に。他の出現例はすべて「おまえ」)

いずれの場合も多少相手を責めているのではあるが、深刻なケンカのシーンというわけではない。

これらの使用状況から見ると、同年齢の中高生の場合、男性の対称は女性よりさらにぞんざいなものであり、しかも女性の相手に対して上位者の立場から遇するものであるといえる。年上の男性になると「おまえ」にかわって「きみ」が多くなり「あなた」「あんた」も現れるなど、年下の女性に対して少し「紳士的」に對しているようすが知れる。もちろんこの場合も「きみ」は上位者から下位者への対称であり、「おまえ」も「きみ」も女性から男性に用いられた例は皆無である。日本語の場合同じ対称(自称)詞であっても男女によって使われる待遇段階が異なることは周知のとおりであるが、(注4) — 例えば「おまえ」は女が用いると相手を罵倒するような卑語になるが、男性では対等な関係でのくだけた表現にすぎないとされる — このような対称詞の待遇段階のズレそのものが、女性を男性より一段下と見、女性はいねいなことばを使わなくてはならないと規定してきた女性観の所産によるものといわなければならない。作品中で「おまえ」と相手を呼ぶ少女、互いに「あなた」と呼びあう男女を設定する現代作家の試みはそのような旧来的な男女観への抵抗である。(注5)ところが、マンガの中高生の登場人物は男性を呼び捨てにしているような女性をも含め、このへんには非常に無感覚で、保守的である。男にも女にもある親しさの表現、くだけてぞんざいな表現がこのような身分的な上下を反映する保守性と結びついているとも考えられる。本来対等なはずの夫婦間で夫から妻へは「おまえ」「きみ」が用いられ、妻は夫を「あなた」と呼ぶ、そしてそのこと自体が夫婦間の支配・被支配の関係へのつながっていくという構造などは、マンガの登場人物となるような中高生などには未だ理解不能の世界であるのかもしれない。

1-3 他 称

1-3-1 家族を表わすことば

自分の両親・兄弟姉妹などを第三者（家族の場合もそうでない場合もある。）に向かって表わす場合、マンガの登場人物はどのようなことばを用いているだろうか。〔表6〕

〔表6〕 自分の家族を表わすことば（「関係」数による）

対 者		家族以外	家 族	モノローグ	関 係 数
両 親 を 表 わ す こ と ば	両 親			1	1
	親		1	1	2
	パ パ	5	2	3	10
	マ マ	5	1	4	10
	お 父 さ ん			1	1
	お 母 さ ん			1	1
	父 さ ん			1	1
	母 さ ん		1		1
	お 母 さ ま		1		1
	父	1			1
	計	11	6	12	29
兄 を 表 わ す こ と ば	兄 さ ん	2			2
	お兄ちゃん	2	1		3
	兄 ちゃん	1			1
	兄 貴	1		1	2
	兄（兄の○○）	1		1	2
	○ ○	3		2	5
	△ △ ○ ○			1	1
こ と ば 弟 を 表 わ す	弟（弟の○○）	4		1	5
	○ ○	4		2	6
	バカども			1	1

表 わ す こ と は 同 年 齢 の 兄 弟 姉 妹 を	○○ちゃん	3	1	1	5
	○ ○			1	1
	お姉ちゃん	1		1	2
	こ の 子	1			1
	や つ			1	1
	計	2 3	2	1 3	3 8
その他	お じ さ ん		1		1

家族以外の人に家族のことを語るときには敬称をつけないというのが一般的な日本語の敬語法であるが、マンガの登場人物の場合、これに従っているものはごく少数で、ほとんどの場合、対称としても用いられる「パパ」「ママ」「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」のようなぞんざいだがくだけて親密さを表す言い方で他者に対しても家族を表わしている。これはこれらの談話の対者が同年代の親しい友人をはじめとして、比較的親しい関係の相手に限られていることにもよると思われる。両親を他者に対して「父親」「母親」と「親」をつけて称したり、特に若い人においては一括して「親」とか「家の人」と一般化して表わす傾向があることについては「女・インタビュー」及び昨年の男性のインタビュー番組における調査（注6）（以下「男・インタビュー」とする）において指摘したところであるが、マンガの場合その傾向はほとんど現れず「親」と称した次の2例があるにすぎない。

(048)「親が心配しているだろうなア」（女子高校生 モノローグ）

(057)「しかたないじゃん、親が泣くんだから」（女子高校生→友人女子）

なお（048）では同じ話者によって「パパやママは何しているのよっ」というモノローグもある。（この話者は気紛れにのぞきこんだ廃屋の地下室に閉じこめられてしまったのである。）

ところで友人など他者の家族を表わす場合、マンガの登場人物はどのようなことばを使っているだろうか。このような語の使われる関係は比較的小さい。(表7参照)

御両親	1	パパとママ	1
お母さん	2	お姉さん	1
お兄さん	3	だんなさん	1 (先生の～)
弟さん	1	赤ちゃん	1

この他に友人の弟を〇〇くん、〇〇ちゃんなどと呼んでいる例もある。いずれにしても最上級の敬語(「～様」)ではないまでも対者に対しても、語られる他者に対しても十分に丁重で穏当な語を用いているといえるだろう。

1-3-2 家族以外の人を表すことば

対称以外の他者を表すことばについては、誰のことを誰に語るのか、という2つの「誰」が語選択のための要素として考えられるわけだが、とりあえずは「誰のことを」どのように表わしているかを見ていき、「誰に」についてはケースに応じて考えていくこととする。マンガの世界での「誰に」は友人、ライバル、教師と生徒、親子など、比較的気のおけない遠慮のない関係が多く、あらたまった場でのあらたまった会話などはあまり見られない。但しモノローグにおける他称については読者に対する語りが含まれるなど通常の対話とは多少の傾向の違いが見られるので別に数えてある。

〔表7〕は対称にならない、他称が表れる「関係」の数を単位として整理した。表中「話題の人物」が「誰のことを」にあたる。

〔表7〕「関係」による人を表わすことば（家族をのぞく）

対話の相手 他称		話題の人物		男 性						女 性						性・年齢 を特定できないもの		計
				年 上		同年齢		年 下		年 上		同年齢		年 下				
		対話	モ/ロ-グ	対話	モ/ロ-グ	対話	モ/ロ-グ	対話	モ/ロ-グ	対話	モ/ロ-グ	対話	モ/ロ-グ	対話	モ/ロ-グ	対話	モ/ロ-グ	
姓・名を基調と する 他称	△ △ さ ん	3	4		1						7	1					16	
	△ △ く ん			24	8												32	
	△ △ ち ゃ ん	2	1														3	
	△ △ 氏			1													1	
	△ △	4	1	9	2												16	
	△ ち ゃ ん			1													1	
	○ ○ さ ん	2	1	1				4	2	4	2						16	
	○○くん(7名含)	7	1	18	7	4									4	2	43	
	○ ○ ち ゃ ん					1		1	8	3	1						14	
	○ ○	6	1	23	10	1			25	9	1						76	
	○ さ ん	1												1			2	
	○ ち ゃ ん	1		2				1	1	1							6	
	○			8	2												10	
	△△○○さん	1						1		2							4	
	△△○○くん			1													1	
	△△○○ちゃん									1							1	
	△ △ ○ ○	1	1	2	2	1											7	
	ニ ッ ク ネ ー ム	1		4	2					2	2				2		13	
	小 計	29	10	94	34	5	2	5	4	48	20	2	0	7	2		262	

役 職・ 職 業・ 立 場 を 基 調 と し た 他 称 (含 、 他 者 の 家 族)	先 生	7	1						1					6		15
	先輩(△△先輩含)	20	2					3	2					1		28
	職業・役職(さん)	1				1								3		5
	お 客 (さん)													2		2
	～ の 女									1				1		2
	～ の 男			1												1
	ヤ ー さ ん													1		1
	王 子 様													2	2	4
	お 姫 様													2		2
	御 兩 親													1		1
	パ パ	1														1
	マ マ							1								1
	お 母 さ ん							1	1							2
	お 兄 さ ん	3														3
	お 姉 さ ん							1								1
	だ ん な さ ん	1														1
	弟 さ ん					1										1
	赤 ち ゃ ん													1		1
	小 計	33	3	1	0	2	0	6	4	1	0	0	0	20	2	72
親 基 族 調 呼 と 称 す を る 他 称	おじさん・おばさん							1								1
	じいさん・ばあさん	1														1
	じ い ち ゃ ん	1														1
	オ ヤ ジ さ ん	1														1
	小 計	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4

連 体 詞 + 名 詞・ 代 名 詞 な ど	～ 方 (か た)													1		1
	あ の 人	2	2	2				1		1						8
	こ の 人		1	2	2											5
	あ の 子 (娘)			2						4		1				7
	こ の 子 (娘)									1		2				3
	そ の 子 (娘)									1						1
	(～な～って) 子 (娘)									2		1	2	2		7
	あ い つ (ら)	3	2	5	8		1			2						21
	こ い つ (ら)		1	2	2					1	1					7
	そ い つ			1												1
	(～な・～の) やつ		1	6	2	1				2	1					13
	(～な・～の) 彼			1	7	1								1		10
	(～ の) 彼 氏			1	1									1		3
	(～ の) 彼 女							5		1	1			2	1	10
	小 計	5	7	22	22	2	1	6	0	15	3	4	2	7	1	97
そ の 他	オ カ マ	1														1
	ウワサの 21番	1														1
	〇 〇 の 下 僕			1												1
	お 坊 っ ち ゃ ま			1												1
	お き な な じ み く ん					1										1
	チ ビ					1										1
	ヤ ン キ ー													1		1
	～ な 野 郎	1	1													2
	小 計	3	1	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	9
計 (他称を用いる関係)		73	21	119	56	11	3	18	8	64	23	6	2	35	5	444

1-3-2-1 姓・名を基調とする他称

姓や名を基調とする他称に現れる呼び方は対称に用いられる呼び方とほとんど同じで、「△△氏」や「△△○○（さん・くん・ちゃん）」とフルネームで表している例が他称らしさとして目立つ程度である。ただその用いられ方について対称と大きく違うのは年上の男性を称する場合である。対称の場合、姓・名を基調とする呼び方は、1例のみのものも含め8種類であったが、他称の場合11種類ある。しかも「△△ちゃん」「△△」「△△○○」ニックネームなど対称に見られなかった例は敬意の度合としてはやや低めのものである。「○○さん」と「○○くん」の割合も逆転して「○○くん」が多くなっており、他称の場合、対称よりも全体として敬意の度合は低くなっているといえるだろう。同年代の男性や、女性を称する場合にはこのような傾向は見られない。

1-3-2-2 役職・職業・立場を基調とする他称

役職・職業・立場を基調とする呼び方では対称と同じく「先輩」「先生」が大きな位置を占めている。特に「先輩」は72例中28例（38.9%）と対称の23例中9例（39.1%）とほぼ同じような割合で現れており、特に女性に対するものが5例と、対称の2例に比して目立つ。男性に対しては同一人物について対称より他称のほうが敬意の度合がさがるが、女性に対してそのようなことはなく、面と向って「△△さん」とよびかけている場合も、後輩」どうしでは「△△先輩」と他称する傾向があるのかと考えられる。

「先生」については対称の23例中9例（39.1%）に対し、72例中15例（20.8%）と割合としてはさがっている。これ以外の教師に対する他称としては、姓名を基調とする他称のうちに「△△」「○さん」「ゴリー山口」（ゴリラに似た生活指導の教師）と呼んでいる例が1関係ずつある。生徒どうして教師を話題にするときに呼び捨てにしたり、あだ名で呼んだりすることは現実には、あたりまえのこと、といった印象もあり、本調査の結果は意外というか、登場人物の女子中高生は大変“行儀がいい”という感じもする。1つの原因としてはこれらのマンガの生徒たちの世界への教師

の関与が希薄であること — 教師とのかかわりや葛藤が題材になっていないし、教師は点景人物としてしか描かれないことにもよるのであろう。

1-3-2-3 「あいつ」「こいつ」など

さて、他称においてもっとも特徴的なのは連体詞（あの・この・その）＋名詞（人・子など）と代名詞による表現である。表から明らかなように、ここで目立つのは「あいつ」「こいつ」「そいつ」とそれに加えて「（～な）やつ」という言い方でこのような表現をする関係97のうち42(43.3%)と半数近くを占めている。これらが使われる対象のほとんどは同年の男性（級友・BFなど）であるが女性や年上の男性について用いられた例も少くない。「あの（この）人」という言い方も対象は「あいつ・こいつ」と同様で男性を中心に女性にも使われているが数はそれほど多くない。この2つの系列は自称における「わたし」「あたし」、対称における「あなた」「あんた」に対応しているかと考えられる。主人公で活発・自己発現的な登場人物が用いる「あいつ・こいつ」と、どちらかといえば副登場人物的な、内気・自己抑制的な人物が用いる「あの・この人」という傾向的な区分ができよう。また、かなりはっきりした傾向として、同年以下の女性に対しては「あの・この子」（「娘」と表記されたものも含めて考える）が使われ「あいつ」「こいつ」はあまり用いられていない。

女性に対して「あいつ」「こいつ」が用いられているのは

(060) 「なにーあいつ、ぶつかってきたのはそっちじゃん／やーねあやまりもしないで」

(067) 「ちょっと、ちょっと、あいつ 誰？」

(067) 「なっ何を言いだすんだ、こいつはあっ」

（モノローグ、相手に突然「尚人くんのこと好き？」と問われ）

(076) 「だってさあ私ミキ怖かったもん、コイツ絶対グレてんなって感じ たったじゃん」

という例で、初対面であったり、よく知らない相手や、その意表をつく行

為に疑問や驚きを示すときに使われている。男性に対する場合にも同じような例はあるが、むしろ多いのは友人やBFへの親密さの表現として用いられた例である。

- (052) 「そうね、とりあえず今は友達^{だち}だから、あいつの欠点もキツイ冗談もな一んでもいえちゃう。」
- (059) 「礼二？ あいつとつつき悪いからむずかしいのかな／かくいうアタシも最初は苦手だったしさ」

いずれも親しい女友達に男性の友人やBFのことを説明している場面である。

一篇のマンガの中で人物AからBを称して何種類かの他称が用いられている場合もある。(048)は主人公の高校生が見知らぬ少年(同じく高校生)と廃屋の地下室に閉じこめられ脱出するまでを描いており、全篇のほとんどが主人公のモノローグで綴られている。ここで一緒に閉じこめられた少年は、正体不明であるうちは「この人」と称され、互いに相手のせいで閉じこめられたと考える段階の敵意の表出には「こんなやつ」。互いに名乗りあって協力して脱出しようとし、その試みの中で少年がケガをして熱を出すシーンからは「彼」「^{すぐる}優くん」へと呼び方がかわって行く。親密さの変化を他称が示している例である。さらにこの後、2人が親しい友人としてつきあうようになっていくとすれば主人公は友人に「あいつが～」とこの少年のことを語るのではないだろうか。なお「彼」については同年代以下の男性を示して9例あるが、7例まではモノローグ中に用いられており、日常的なくだけた会話の中で使いにくい面があるのかと考えられる。「彼氏」は「誰かの恋人」を指す専用語、「彼女」については年上の女性を指して言っているのが目立つ。いずれにしても、これらの他称については、誰に対してどの語を用いるかという使い分けの意識がはっきりと見られる。また特に親しい年上の男性を指す場合を中心に対称よりも他称で低く遇するという傾向も前述の通りである。

「あいつ」「こいつ」を用いて話すことばはおのずと、いわゆる丁寧な物言いとは遠くなる。女子中高生が「男言葉」を使うという現象の指摘はすでにしばしば行われているところであるが、前にあげた例でも、特に(059)(067)(076)などは「私」「アタシ」等の自称を除けば、語り手が男性であったとしても異和感のないことばづかいと言える。このようなことばのありようを「女らしくない」「乱暴だ」と批判する向きもあろう。しかし相手を「とっつき悪くてむずかしいけど」大事な友達なのだ、とする意識「欠点でもキツイ冗談でも」言いながらつきあっていくのだとする仲間意識は、従来の男性がリードし女性は選ばれるのを待つというような、間に一線を画した男女のつきあいとは異質な、むしろ男どうしの遠慮ないつきあいにも共通するものだろうし、そこで「あいつ」「こいつ」や歯切れのよい「男言葉」が出てくるのはごく自然なことのように思われる。人にぶつかられたときの怒りの表出や、不快を感じさせる未知の人物を誰かと問うことばなども、洗練された形とはいえないが、そのような素直な心の表出を少女たちがする(できる)ようになったと見るべきで、仲間うちであればこそ不快感を表出するのにより直截な言い方が用いられるのは当然のことであろう。そして、このような女子中高生も、ぶつかった相手と親しくなったり、BFが年上であったりした場合にはそれなりの待遇表現へと転換を行う。それが年上男性の対称における他称に比しての待遇の度合の高さや、(048)のような他称の変化に現れていするとみるべきなのではないだろうか。

2. 敬語表現の用いられかた

本調査の対象とした女子中高生の敬語表現には次の2つの大きな特徴がある。その1つはいわゆる敬語表現の出現量が非常に少ないこと。〔表8～11〕に見られるように、全4627の談話総数に現れる敬語表現は尊敬表現98例(2.1%)譲渡表現27例(0.6%)丁寧表現231例(5.0%)「お」「ご」のつく名詞118例(2.6%)にすぎない。これらはいずれも使われた「関係」の数ではなく例数である。しかもこの数のうちには、定形化された挨拶語や、「お」

「ご」がついた形で必ず用いられる美化語、また敬語表現と見るには疑念もある「～なさい」「～してください」「お呼び」のような命令形をも含んだものである。ことに尊敬表現においては挨拶語や命令形が大半を占め、一般的な尊敬表現はたった4例（～なさる、～てくださる、お…い各1例）しか見られない。

その2は、これらの尊敬表現（尊敬・譲渡）における敬意の対象が「お・「ご」＋名詞形に見られる数例を除いては例外なく、対者と一致していることである。すなわち、その場にいない話題の人物について「〇〇さんが～なさる」というような言い方は全く見られない。これらの意味については後で考察することとし、次に出現している敬語表現を整理してみる。〔表8～11〕この表においては前述の通り「～なさい」「～ください」をも尊敬表現における命令形と見なし、挨拶語についてもいわゆる「美化語」として一括するのでなく、一応そのもとの形に従って、それぞれ尊敬・譲渡・丁寧表現に分類してある。

〔表 8〕

尊敬表現の形式と出現数

対 者=敬意の 対 象 表現形式		男 性						女 性						性、年齢	計
		年 上		同 年		年 下		年 上		同 年		年 下		等 特 定	
		家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	で き ず	
一般 敬的 表現	～ な さ る				1										1
	～ てください							1							1
	いらっしゃる				1										1
命 令 形	～ (て) な さい		1		6	1	1			1	4		2		16
	～ ください		1		5				2					1	9
	お～ ください							1							1
	お ～		2		1	2									5
	お っ しゃ い		1												1
形容詞	お ～ い		1												1
接 拶 語	ごん(ん)・ごん(て)				3		1				6			4	14
	ごめんなさい		6		6				4		5			1	22
	お 帰 り			1	1										2
	お帰りなさい	1													1
	お や す み										1				1
	おやすみなさい				1						1				2
	いらっしゃい			1											1

いらっしゃいませ													1	1
おはよう		1		6						7				14
おめでとう				2										2
ごろうきまでした										1				1
おつかれ				1										1
計	1	13	2	34	3	2	2	6	1	25	0	2	7	98

〔表 9〕

譲渡表現の形式と出現数

対 者=敬意 対 象 表現形式	男 性						女 性						性、年齢	計
	年 上		同 年		年 下		年 上		同 年		年 下		等 特 定 で き ず	
	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人		
お（ご）～する		4		2				1		1			2	10
お 待 た せ										1				1
お 願 い(だ・ね)		3		2		1		1		3		2		12
～ て い た だ く		2												2
～ て い た だ け る		1												1
いただきます（挨拶語）													1	1
計	0	10	0	4	0	1	0	2	0	5	0	2	3	27

〔表10〕

丁寧表現の形式と出現数

対 者＝敬意の 対 象 表現形式		男 性						女 性						性、年齢	計
		年 上		同 年		年 下		年 上		同 年		年 下		等 特 定	
		家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	で き ず	
す 系	～です(ね、よ、 よね、けど)		38		16			1	4		2			13	74
	～ でした													1	1
	～でしょう？	1	7		18	1			1		7		6		41
	～でしょうか？		1											1	2
	で す か ？		26		3				3		1			1	34
	で す っ て ？										2				2
	ですかってんだ		1		1										2
ま す ・ ご ざ い ま す 系	～ます(ね、よ、 よね、けど、名詞)		16		4				2					9	31
	～ ま し た	1	3		1				2		1			3	11
	～ましよう(う)		1		3										4
	～ましようか？										1				1
	～ません(よ)		1		1									1	3
	～ ま す か ？													1	1
	～ ま せ ん か ？		1												1
	～ ま し た ？		1												1
	ようございました		1												1

族	ごちそうさまでした				1											1
	ごくろうさまでした*							1								1
	おそまつさま				1											1
挨拶	いただきます	1	1													2
	いただきます*													1		1
	失礼します		1					1								2
語	すみません		5					2						1		8
	すいません		2													2
	いらいしゃいませ*													1		1
	ありがとうございました		1		1											2
	計	3 (0.8)	107 (46.3)	0 (0)	50 (21.6)	1 (0.4)	0 (0)	1 (0.4)	16 (6.9)	0 (0)	14 (6.1)	0 (0)	6 (2.6)	33 (14.3)		231 100

(注) *印のものについては尊敬または譲渡の表現の表にもダブルで数えてある。

「お」「ご」のつくことは

— 64 —

女・同年	お家 おふたり*	4 () 1 ()			お 肌△ お 客 お 酒 お花見 お医者(さん) お風呂△(3)	8・ お別れ お互いさま おでん(2) お見舞い(品)(2) お子様セット おじぎ おまけ	10 (0.84)
*は 男年上の 「おふより」 に同じ (1192)	お嬢さん お休み(男友人)	() 1 ()					
男・年下 (90)	お言葉	1 (1.11)			お話し	1 (1.11)	
女・年下 (42)						おまけ	1 (2.38)
モノローグ (1265)	お墓参り お仕事(父) お世話(女友人)	3 () 3 ()	お礼(男友人)	1 () 1 ()	お天気 お客さん お祭り お弁当(2) お金もうけ お風呂(2) お役(にたつ) お世話(になる) お互い	11 おしゃべり おしまい(4) お別れ おかげ おせじ(2) おまけ(2) おしゃれ	12 (0.95)
計 (4571)		22 (6) (0.48)		5 (1) (0.11)		46 (1.01)	45 (0.98)

(注) 1. 語末の(数字)は出現の回数(2回以上のもの)を示す。

2. 尊敬語中、語の末尾に()のついているものは、対者以外を話題の人物として尊敬しているものであり、()に尊敬されている対象を記した。また語数の下の()内はそのようなものの出現で数である。

3. 女同年の丁寧語に見られる△は、同一語で「お」をつけずに同一の話者によって用いられた例があるものである。

4. 各欄の()内は、対者別の談話数に対する出現の割合(%)である。

5. 談話総数4627のうち対者が不明なものの56例を除いた4571について分類した。なお、この56例について「お」「ご」のつく名詞は出現していない。

マンガに現れる敬語表現数が少ないことは〔表 8～11〕に見る通りであるが、これを女・インタビュー、男・インタビューのゲストによる敬語表現の出現数と比較してみる。〔表12〕

〔表12〕 三調査における敬語表現出現数

	談話数	尊敬表現		譲渡表現		丁寧表現		「お」「ご」のつくことば		
								尊敬	譲渡	丁寧
女・インタビュー	1078	78	(%) 7.2	62	(%) 5.8	2205	204.5	9 1		8.4(%)
								38	4	49
男・インタビュー	1778	56	3.1	37	2.1	1314	73.9	4 7		2.6(%)
								24	5	18
マ ン ガ	4627	98	(36) 2.1	27	(26) 0.6	231	(210) 5.0	7 3		1.6(%)
								22	5	46

〔注〕・（ ）内は定型化された挨拶語を除いた数である。

・「お」「ご」のつくことばのうち、必ず「お」「ご」を伴った形でもちいられる「おぼけ」「ごはん」のようなものは除いてある。

過去のインタビューによる調査では、〔表12〕のように談話数に対する敬語の出現率においては女性は男性より全体的に高い、すなわち男性より敬語を多く使い丁寧なものを使っているという結果を得た。しかしこれには個人差、年令差、話題の反映などの影響も大きく、どんな女性でも平均的に男性より敬語を多用するとはいえないということもわかった。

マンガの女子中高生は、インタビューの女性たちに比してはもちろん、男性に比しても敬語の使用に関しては遠く及ばない。もちろんこの場合、公共の電波にのるインタビューのことばと親しい仲間うちを中心とする日常の会話であるという談話の性質の差を、考えにいれるべきではあるが。

インタビュー調査においては男女ともに尊敬表現・譲渡表現の使用が少なく、丁寧表現が非常に多かった。これについて男女両調査の担当者（卓・片桐）はいずれも丁寧語に敬語という意識が薄れているという報告（国立国

語研究所報告77『敬語と敬語意識』三省堂 1983)を引用し、出現した丁寧語が対者への敬意の表出としてよりは発話者自身の品位を保つものとして用いられていると論じた。話者が自身の品位を保とうとすれば、対者が誰であるかにかかわらず、表現はおのずと丁寧なものになっていくであろう。実際に男女インタビューにおける話者の丁寧語の多用はこのことを裏づけているといえよう。しかし本調査のマンガにおける話者の表現についても同じことがいえるのかどうかには疑問がある。

本調査においても、男・女インタビューと同様に、尊敬表現・譲渡表現に比べて丁寧表現が多用されているが、その出現率は、5%、20談話に1例の割合でしかない。インタビューの場合男性で7割、女性にいたっては1談話に2つ以上の丁寧表現が現れているのとは比べるべくもない少なさである。しかもその現れ方には談話の相手による使い分けの意識がかなりはっきりと見られるように思われる。〔表10〕によれば、231例の丁寧表現のうち年上の男性に対して用いられたものが107例(46.3%)、年上の女性に対するものが16例(6.9%)と過半数を占めている。しかもこれを、それぞれの対話の相手との関係による談話数の比として表してみると、さらにその傾向が強はっきりといえる。〔表13〕は、「丁寧表現、および『お』、『ご』のつくことば」について、関係における談話数に占める割合を表している。

〔表13〕 丁寧表現の談話数に占める割合

対 者	男 性						女 性					
	年 上		同 年		年 下		年 上		同 年		年 下	
	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人	家族	他人
談 話 数	56	560	69	1163	25	65	43	91	47	1145	1	41
	620		1232		90		134		1192		42	
丁寧表現	3 %	107 %	0	50	1	0	1	16	0	14	0	6
	(5.4)	(19.1)	(0)	(4.3)	(4.0)	(0)	(2.3)	(17.6)	(0)	(1.2)	(0)	(4.6)
「お」「ご」のつく 丁寧語	8		15		1		3		8		0	
	(1.3)%		(1.2)		(1.1)		(2.2)		(0.7)		(0)	
計	118		65		2		20		22		6	
	(19.0)%		(5.3)		(2.2)		(14.9)		(1.8)		(14.2)	

〔表13〕に見る通り「お」「ご」のつくことばも含めた丁寧表現は年上の相手に対して多く用いられ、対者による使い分けの意識がはっきりと現れていることがわかる。例外的に年下の女性に対しての丁寧表現が多く現れているが、これはすべて「～でしょ（う）？」と問いかけの形で用いられたもので、この形は〔表10〕で見るとおり年齢、家族・非家族の別を問わず、どのような相手にも比較的よく用いられているものである。

丁寧表現に発話者自らの品位を高めるという使用意図があるとしても、ある特定の相手に対して自らの品位を高めようという意識は対者への待遇意識にほかならない。しかも、マンガの女子中高生のように尊敬表現や譲渡表現をほとんど用いないという状況であれば、このように用いられる丁寧表現にこめられた対者を高めようという意識は相対的に相当大きな意味を持つのではないか。

なお、さきにも述べたとおり、マンガにおける女子中高生の数少ない尊敬表現、譲渡表現は例外なく、目の前にいる対者を話題の人物として高めたものばかりで、「お」「ご」のつく名詞7例ほどの例外を除いて、第三者に対する敬意を表しているものはない。同じ人物の同じ行為について

(063)「何だっていいのよ、お母さまがかってきてくださるのなら」(母に)
「見てほら／お母さまに買ってもらっちゃった。」(兄に)

のように、行為の当事者である母には「買ってきてくださる」と敬語を用い、第三者である兄に対しては「買ってもらう」と常体で話しているという例も見られる。このような敬語の用い方は、同じ人物を面と向っては「あなた」「あんた」と呼び、他の人物に対して語るときには「あいつ」と言う呼称の用い方とも共通して、マンガの女子中高生の敬意の表出がもっぱら目の前にいる相手にのみ向けられるということを示している。以上を考え合わせても、丁寧表現にこめられた敬語としての役割は単なる自らの品位の保持であるというにとどまらず、相当大きな意味を持つものといえよう。尊敬表現や譲渡表現ではあまりにへりくだり改まるすぎるといふ親しい気軽な人間関係における敬意の表出が丁寧表現という“便利”な敬語の形態によってもっぱら補われているとも考えられる。

3. ま と め

男女の敬語の使い分け能力について、1つの“古典的”な見方がある。これは国立国語研究所が岡崎で行った敬語調査（1952. 53）に基づき野元菊雄氏が分析し、南不二男氏らによって継承・紹介される見方であるが、その要点は次のようなものである。

- (1) 女性のことばは男性よりていねいである。
- (2) 敬語の使い分け能力を男女別に見ると、男の方が高い能力を有する。
男の方が場面によってよく使い分けるが、女の方はいつもていねいな敬語形式を使い場面によって、使い分けない傾向がある。
- (3) 敬語の使い分け能力が最高に達するのは男性30代、女性20代である。

（野元菊雄『敬語をどう使い分けるか』「講座ことばの生活」3 1967
南不二男『日本語の敬語』大修館日本語講座1「日本語の姿」1976より抜粋、まとめた）

南氏氏自身が既にこの調査の古さを指摘し、実態は変化しつつあるとも言っておられ、実際に1990年に井出祥子氏らが行った調査によれば、働く男女においては、女性のほうが男性より敬語の使い分けの幅は広いという逆の結果も出ているとのことである。

マンガに見る女子中高生の呼称を含む敬語の実態も岡崎の調査やその分析とは既に遠く隔っていることはあきらかである。特に(2)のように女性がいつもていねいな言い方を用い、場面による使い分けをしないという点について本調査の結果は明らかに異なるものであった。とはいえ今回の調査にも例外的な少数ではあるが、チンピラに襲われた女子高生が

(236)「いや!! やめてください」

「いやです!! 放してください」

と哀願するような物言いもあって、これが従来の女性に見られ、また期待された“女性らしい”丁寧さかとも思われるのである。これではとうていチンピラら撃退はおぼつかないし、まさに「敬語の使い分け能力」の欠如が身を

守る「能力」の欠如に直結するような例といえる。 — この例が突如現れてこの少女を助ける少年を主人公とする「少年マンガ」に現れることもムベなるかな — しかし男の子に頼らない少女マンガの主人公は

(034)「ザケンじゃねえ、このオカマ野郎！」

と叫ぶ。荒々しい言い方ではあるが、丁寧ではない表現形式をも使い得ることをもって「能力」とするのならば、マンガの女子中高生は、十分に使い分け能力を持っていることになる。

野元氏や南氏が「能力」とされているものは結局、話し手の置かれた場によって規定されるものであり、岡崎の第一次調査の行われた1950年代の女性が、特に男性との関係において従の位置におり、家庭をその生活のほとんど唯一の場として、対等もしくは対等以下の人間関係をほとんど持たなかったことを示しているにすぎない。20代の女性の敬語能力が最高に達するのは結婚前の職業生活などによってこの年代の女性の人間関係がもっとも豊かなものであったということなのである。さらにまた約40年後に行われた井出氏らの調査の結果も、女性の社会進出と、それにともなう人間関係の多様化の結果と見ることができる。

マンガの世界の女子中高生は、対等で親しい女性の友人や、対等で親しいはずなのではあるが、女性を「おまえ」と呼び、呼び捨てにし無敬語で遇する男性の友人とともに暮らしている。彼女たちのもの言いは従来の「女らしい」丁寧さを持つものではないが、これはその状況における最も的確な表現を選びとったものなのだと考える。そのような表現はときに、若い女性は自分に敬語を使ってほしい、もっと「女らしい」ことばを使うべきだと考えるおとなの価値観と対立し、批判を受けることもある。しかし、それらの表現が選ばれたものである以上、彼女たちの中には相手に応じて、より丁寧な表現を用いようとする使い分けの意識は確実に存在する。それについては1-2「対称」、2「敬語表現の用いられかた」等で述べたとおりである。彼女たちにとって先生や先輩は尊敬語や譲渡語は使わないが丁寧語を使って敬

意を表するという距離にある存在なのである。さらに、マンガの女子中高生たちが「ことばの選択」を意識していることを示すセリフ2例を紹介しておく。

(068)「野柴木くんいらっしゃいますか、でいい?」「(好きな男子生徒にはじめて電話をしようとする少女が、何と言えいいかを友人に相談している例)

(108)「菊丸の新聞部ですが、『ゲーセン(ゲームセンター)事情』と題して取材させていただきたいのですがとでっちあげれば話もできるし写真も撮れる」(あこがれの他校生と話の機会を作りたい新聞部員たちが、どのようにアプローチするかを相談している例)

いずれも少し距離のある、しかし好意を伝えたい相手に対して、敬語表現を用いて話しかけようという意図が選択されていることがわかる。

このような使い分けの意識の自在さは、現実にも用いられていることばをエネルギーギッシュなものとして、ことばの実態を確実に変えていく面を持つが、同時にその自在さのあまりに、彼女たちが従来の「女らしさ」に含まれたマイナス面、保守的な面を無批判にとり入れていく可能性も常に存在するといえるだろう。女子中高生のことばは結局「過渡期のことば」である。彼女たちの未来にどのような暮しの場、人間関係が用意されるかによって彼女たちのおとなとしてのことばのありようが決定されていくであろうことを、彼女たちの敬語表現は示している。

注 1. 共同研究「女性の話しことば」

— テレビのインタビュー番組から — (ことば10号 1989)

注 2. 「作家に見ることばの特徴」

— あだち充『タッチ』を中心に —

(田中政幸 「日本語学」1989.9)

注 3. 日本語と女 (寿岳章子 岩波新書 1979)

注 4. 「女のことば・男のことば」(井出祥子 日経通信社 1979) など

注 5. このことについては拙論『吉本ばななの「家族」と「ことば」 — 対称代名詞「おまえ」をめぐる — 』(ことば11号 1990)で述べたところである。

注 6. 共同研究「男性の話しことば」

— 「女性の話しことば」と比較して — (ことば11号 1990)